

「森銑三刈谷の会」だより 46(2025/10/18)

発行 2025/10/18 (月刊・メールでの投稿歓迎)

例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会

共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

表 永井荷風『断腸亭日乗』で読む森銑三「偏奇館の或日」(抜粋)

項目	森記述【下線编者】	出典	年	永井「断腸亭日乗」・毎日新聞など記述【下線编者】	出典
浅草オペラ館女優	昭和十八年か、十九年だったらう。季節は、今頃[1952]の晩秋初冬のころではなかったかと思ふ。偏奇館の応接間で、図らずも浅草オペラ館か女優さんと落合ったことがある。	森(1969b)『偏奇館の或日』『明治人物夜話』東京美術、p.131<初出 森(1953/1)角川書店『昭和文学全集5:永井荷風集』月報5>	1944	9/27 森銑三君来話。?時 田毎美津江[たごとみつえ(推定); b.1925ごろか; 1938/7/14-50/8/3に14回掲出]もとオペラ館芸人 来話。北海道へ興行に行くと言ふ / 12/19 午後森銑三君来話。(1944年日乗に森11回頻出)/ 12/1田毎美津江 移動劇場女優 北海道より来書。	永井壮吉、稲垣達郎ほか[編](1993-95)「断腸亭日乗」『荷風全集』21-26, 30(索引)、岩波書店
森最後の訪問	偏奇館を最後に訪うたのは、二十年の二月だつたらうか(略)/それから二箇月後に永井さんも私[1945/4/13(森(1975)『思ひ出すことなど』中央公論社)も罹災した。	森(1969a)「永井さんの思ひ出」前掲 p.129<初出 森(1950/8)中央公論社『永井荷風全集』13付録14>	1945	1945/1/12 午後森銑三君来話。 / 3/9 夜半空襲[東京大空襲]あり、翌晩[3/10]四時わが偏奇館[市兵衛町]焼亡す / 4/18?下木戸君旧オペラ館芸人田毎美津江を伴ひ来り話す。 / 10/29 [戦後] 初て午後森銑三君の書を得たり。	前掲「断腸亭日乗」 『森銑三著作集』(1993)続編6:413-25,24 (初出 森「素顔の文人」12永井荷風、中央公論社『海』9(12)(1977/12)pp. 94-103)
Y新聞社のA氏	昭和二十四年の冬の初め頃ではなかったかと思ふ。(略)Y新聞社のA氏から、電話がかかってくる。 (略)M紙で、工の小説を出しかけたのだから、(略)永井さんを取り上げたい(略)/浅草ロック座の楽屋に永井さんを襲撃したなどといふは	森(1969c)「浅草での永井さん」前掲、p.133<初出 森(1962/10)「浅草」世界文庫『荷風研究文明』2(1)>	1950	<課題>昭和二十四年の冬の初め頃、Y新聞社、A氏、M紙、T(小説家) 1950 3/6 ロック座に入るに読売新聞女記者あり新聞小説の執筆を強要す a /3/8 午後浅草。偶然森銑三氏安藤徳器氏某女史等に会ふ	前掲「断腸亭日乗」
通俗雑誌での踊子達との会談	四五年前[1948-49]だつたか、何かの通俗雑誌に、永井さんと浅草の踊子達との会談の速記が出てゐるのを、本屋の店頭で覗いた	森(1969b)『偏奇館の或日』同上、p.132	1950 b	1950/6/6 浅草公園巴里園文藝春秋社招飲。踊子も五六人来る。	前掲「断腸亭日乗」
永井文化勲章受章	この間[1953/1起算]、文化勲章を拝受された日、珍しく家にあたら、昼少し過に家内が呼ぶ。(略)ラジオが永井さんの肉声を伝えてゐた	森(1969b)「偏奇館の或日」同上、p.132	1950 c 1952 a	『荷風全集』28(1994)後記『断腸亭 座談会「荷風先生とストリップ」文藝春秋「オール日乗」に(略)記述はない(p.583)』 読物』5(8) 1950/8:80-90 11/3(略)玄関外に出て新聞写真班の撮影ありて後初めの応接間にてまた日本茶を喫す。これにて勲章授与式は終る。午後三時なり 「人気の焦点はなんといつても永井荷風氏。珍しくモーニングを着こんだ先生、ちよつとでれながら「けさは早くから起きて(略)」	前掲「断腸亭日乗」 毎日新聞 (1952/11/3:2夕)

46 : 2025/9/20(土) 第1会議室 : 鈴木哲「永井荷風『断腸亭日乗』で読む森銑三「偏奇館の或日」」(参加8人)

鈴木 哲

森銑三「偏奇館の或日」初出は森(1953/1)角川書店『昭和文学全集5:永井荷風集』月報5である。その後、『明治人物夜話』(1969)東京美術、『明治人物夜話』(1973)講談社文庫、『森銑三著作集』続編(1993)6:398-400、中央公論社、そして『新編明治人物夜話』(2001)岩波文庫に収録されている。「偏奇館」(へんきかん)は荷風(1879-1959)市兵衛町(現六本木)の住居(1920-45)である。

『明治人物夜話』は「偏奇館の或日」のほか、「永井さんの思ひ出」(中央公論社『永井荷風全集』13(1950/8)付録14)、「浅草での永井さん」(「浅草」世界文庫『荷風研究文明』2(1)(1962/10))が納められている。

その中にあいまいな記述がある。あいまいさは記憶がはっきりしない場合と、明記が憚られる場合が考えられる。しかし、半世紀以上経過した今日これらを明らかにすることに支障はないであろう。例えば「偏奇館の或日」の浅草オペラ館女優はだれか、「四五年前」の「通俗雑誌」は何か、「永井さんの思ひ出」にある偏奇館を森が最後に訪うたのはいつだったか、また「浅草での永井さん」に見えるA氏やTは誰であったろうか。

これら疑問は推理小説の趣があり、「断腸亭日乗」などで明らかにできた。その結果を表(冒頭)にまとめた。

なお、当日A氏を読売新聞女記者安藤徳器としたが、神谷さんのお調べで、歴史家・文筆家安藤徳器(あんど うとくき;1902-53)<男性>と確かめられた。安藤には『趣味の維新外史』(1934,日本公論社)などの著書がある。



図 [左から]森銑三『明治人物夜話』(1969)東京美術、『明治人物夜話』(1973)講談社文庫、『森銑三著作集』続編(1993)6中央公論社(以上「永井さんの思ひ出」「偏奇館の或日」「浅草での永井さん」所収)、『新編明治人物夜話』(2001)岩波文庫(「永井さんの思ひ出」「浅草での永井さん」未収)。いずれも刈谷市立図書館蔵。なお『明治人物夜話』(1969)東京美術は(『近世人物夜話』(1968)東京美術と同様に)国立国会図書館デジタルコレクションでも読むことができる。

その先まで調べてみようと思わせるような楽しさ

飯田芳子

『明治人物夜話』「永井さんの思ひ出」「偏奇館の或日」「浅草での永井さん」を読み、永井荷風『断腸亭日乗』に登場する森銑三を読むと、実に面白い。読売新聞は毎日新聞の谷崎潤一郎に対抗して荷風に執筆をと銑三にまで交渉役を依頼する。確に対抗馬として魅力的である。煩累偲ぶべからず。不成功に終わったようである。当時(1950)の読売新聞連載作家を調べてみた。間違いがなければ、坂口安吾「街はふるさと」である。

文化勲章受章は外野の思惑に反して荷風の心を素直な

喜びで満ちたようである。一族はその栄誉を迎え入れ、父久一郎の隣に埋葬。荷風の希望は適えられなかったが、雑司ヶ谷は都会の中にもかかわらず閑静な場所という。

今回の発表には、(レジュメの「浅草での永井さん」の「Y新聞社のA氏」に空白があるなど)その先まで調べてみようと思わせるような楽しさがあった。

戦時下の荷風・銚三の付き合い

神谷磨利子

「永井さんの思ひ出」を全文読むと、戦争中、反国策的な作風のため作品発表の場を失った荷風に銚三がどのように接したかが伺える。1944年暮、偏奇館を訪ねた銚三は荷風から成島柳北(1837-84、漢詩人、随筆家、新聞人)の日記の写しを借り、夢中で読み写している。銚三も柳北の手簡を持っている磐瀬三郎を偏奇館に同伴している。戦時下にあって荷風・銚三の関心の在り処がどこにあるかが分かって面白い。しかもその磐瀬三郎とは銚三の友人蔵田周忠の仲介で相識となった(『森銚三著作集』12巻 p.404)のだから、銚三の周りの人のつながり・本のつながりに思いは広がる。

その上で鈴木さんの場合は、銚三の文章中の伏せている年や人物名を、『断腸亭日乗』や新聞記事などから明らかにされた。謎解きが楽しめた。出席者の中にも、様々な見方があって面白いという感想があった。

伝記家の銚三自身、未完の日記や自家版の書物などから、新しい発見をした時の喜びを綴っている。

<紙面都合によりご投稿文面を一部編集しました>

付録 46(2025/9/20)課題・森(1969c)「浅草での永井さん」『明治人物夜話』東京美術の「Y新聞社のA氏」解答

鈴木 哲

課題編 昭和二十四年の冬の初め頃ではなかったかと思ふ。(略)Y新聞社のA氏から、電話がかかってくる。永井さんの小説が、内の新聞社でどうしても欲しいのだ。君から何とか頼んでくれないか(略)M紙で、Tの小説を出しかけたのだから、それに対抗して、どうしてもわが社では、永井さんを取り上げたい。(森, 1969c, p.133)

解答編 「Y新聞」「M紙」は読売新聞、毎日新聞と推測できる。「A氏」は読売の関係者で、「T」は「M紙」に連載した小説家と想像される。荷風「断腸亭日乗」1949年ごろの記事を探せば見つかると思った。

「断腸亭日乗」によると、新聞小説の執筆依頼攻勢は1949年でなく翌1950年である。

1950/3/6 ロック座に入るに読売新聞女記者あり新聞小説の執筆を強要す。煩累偲ふべからず /3/8 午後浅草。偶然森銚三氏安藤徳器氏某女史等に会ふ。

(永井(1993-95)「断腸亭日乗」下線筆者)

A氏は安藤徳器と判明する。執筆依頼の記事はこれがすべてである。「断腸亭日乗」掲出の安藤徳器はこの一度きりである(日乗人名索引による)。森は「存外下らないことをするとでも」「書かれてゐるかもしれない」と懸念したが、永井記述は淡泊である。歴史家・文筆家の安藤徳器(あんど うとくき 1902-53)は日本近代文学館[編](1977)『日本近代文学大事典』1, 講談社に立項(紅野謙介 2021 記)がある(神谷さん教授)。

森(1993, 6:424)「永井荷風」(初出「素顔の文人-12-永井荷風」中央公論社『海』9(12)(1977/12)pp. 94-103))に安藤が見える(下線筆者)。

当時読売新聞に安藤徳器といふ記者がゐて、私はこの安藤氏に無理やりに引つ張り回されたことがあります。(略)毎日新聞紙が谷崎潤一郎の小説を連載してみたので、それに対抗して、読売ではぜひ永井さんの小説が欲しいといふわけです/永井さんの日記に(略)アツサリ書いてあつたので、ほつとしたけれど。(森, 1993, 6:424「永井荷風」)

「M紙」は毎日新聞、「T」は谷崎潤一郎(1886-1965)と知られる。連載は1949/11/1-1950/2/9「少将滋幹[しげもと]の母」である。「Y新聞社」「A氏」「M紙」「T」を解明することができた。1950/3/6に永井が読売新聞執筆を断ったことにより、坂口安吾(1906-55)が1950/5/19-10/18に「街はふるさと」を執筆した。

「永井さんの思ひ出」の末尾に「とかうする内に、永井さんは物故せられ、無鉄砲の隊長のやうなA氏も、あつけなく逝つた」(森, 1969, p.135)とある。記事初出1962/10で、安藤1953年没、永井1959年没に符合する。(付録が期せずして長文となりました。お許しください)

予定 2025/9-2026/3

- 47: 2025/10/18(土) 2階展示コーナー・視聴覚室:
村瀬典章氏[解説]「刈谷図書館創立110周年記念
刈谷図書館と村上文庫展」
- 48: 2025/11/15(土) 第1会議室: 神谷磨利子「森銚三
(1934)「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子
銭独楽』(寛政5年[1793], 出版つたや)を読もう」
2025/12 休会 (8, 12月は休会)
- 49: 2026/1/17(土): 続「森銚三(1934)「黄表紙作家としての
唐来三和」～『再会親子銭独楽』(寛政5年
[1793], 出版つたや)を読もう」
- 50: 2026/2/21(土): お申し出下さい。
- 51: 2026/3/21(土): お申し出下さい。